



MG COLLECTION

受け継がれるもの



インブリー館前の銀杏の木

銀杏（イチョウ）は中国から日本に持ち込まれ、その後日本から西洋に伝わったという。銀杏の葉の形が西洋人の想像力を掻き立てたのか、ドイツの詩人ゲーテは、銀杏の学名である *Ginkgo biloba* というタイトルの詩を、若い恋人に、二枚の銀杏の葉を添えて送った。二枚の葉がくつついたような、あるいは一枚の葉が二つに割れているような形をした銀杏の葉に託して、ゲーテは恋人との関係をあらわした。明治学院の銀杏の木は、島崎藤村が作詞した校歌にも歌われ、回顧録の中でも描かれた記念樹の一本である。一九一四年のサンダム館の火災では、卒業生の植えた三本の銀杏の木にも火の手が及んだが、一本だけが生き残り、現在のインブリー館の前に移植され、記念樹として学院を見守り続けている。銀杏の葉の形は、ゲーテ風にいえば、明治学院の各学校を結びつける象徴のようにも思えてくる。

学院長 鵜殿博喜